



コメント  
Comment

辛徳勇氏の報告について

松本 保宣

今回の辛徳勇氏のご講演は、唐代の長安城研究の基本的文献について、①韋述『兩京新記』、②宋敏求『長安志』、③呂大防『長安図』、李好文『長安志図』、④その他として、程大昌『雍録』、駱天驥『類編長安志』、王士点『禁扁』、徐松『唐兩京城坊考』を挙げられ、それらの文献の来歴、版本、評価等について氏の研究成果の一端を披瀝されたものであった。氏は韋述『兩京新記』と宋敏求『長安志』を高く評価され、徐松『唐兩京城坊考』については、④で他の文献と一括して論じられているように、前二者に比べ低い評価をされている。

一般に文献の記述については、当該の時代に近いほど、つまり古いほど信頼性が高いのは常識であるが、唐代の長安と洛陽の研究については、清代の著述である徐松『唐兩京城坊考』が学术界で高い権威を有してきた。その理由として、韋氏の著述を宋氏が『長安志』において継承し、徐松がその基盤の上に史料を博搜して考証を加えた総合的研究書としての同書の性格と、洛陽の史料に関しては韋・宋両氏の書が共に散佚しており、徐氏の補綴の功績が特筆すべきものであることなどが指摘できよう。特に我が国では平岡武夫氏が、『唐代研究のしおり』中の『唐代の長安と洛陽 資料編』（同朋舎、一九七七年）において同書を基本文献の筆頭に位置

付けられ、愛宕元氏の注訳書（平凡社東洋文庫、一九九四年）が出版される等評価が定着している。又、中国においても中華書局評点本（一九八五年）が刊行され、閻文儒・閻万鈞『兩京城坊考補』（河南人民出版社、一九九二年）、楊鴻年氏『隋唐兩京城坊里譜』（上海古籍出版社、一九九九年）等、『唐兩京城坊考』に依拠した増補がなされるなど不動の地位を占めている観がある。

しかしながら、その名声故、同書はいささか安易に拠り所とされてきたのではないかというのが、筆者の自戒をこめた印象である。『新唐書』・『新五代史』出でて『旧唐書』・『旧五代史』駆逐され、或いは辛氏も論じられる如く、『長安志』出でて『兩京新記』湮滅す、といった傾向は、何も宋代だけの話ではなく、現代でも教訓とすべきではなかろうか。辛氏には、『河南志』の史料ソースとなった唐杜宝の『大業雜記』に関する「『大業雜記』考説」（『古籍整理與研究』一九八七—）なる論考があり、時期を遡って原史料を追究しようとする姿勢がみられる<sup>1)</sup>。又、『唐兩京城坊考』を始めとする文献史料の疑点について詳細な考証を施された専著『隋唐兩京叢考』（三秦出版社、一九九一年）を刊行されている。本書では、繰り返し徐氏の考証の遺漏を指摘されており、『唐兩京城坊考』を利用する際、必読の文献であるといえよう。

私事であるが、筆者もかつて、隋唐の洛陽宮中枢部分を考証した際、徐松の考察に明らかな矛盾を発見し、杜宝『大業雜記』や韋述『集賢注記』等の唐人の記述を用いて、別に復原案を提示したことがあった。又、北宋人が頻々と議論を重ね、著名ながらもその実態・意義が曖昧、不明の朝会儀礼「入閣の儀」について、徐松の説に異を立てた拙論を出したが、その際も主として唐人の残した史料に依拠した<sup>2)</sup>。文献史学の上では、たとえ零細な史料であっても、なるべく同時代に近い史料を立脚点とするのが基本であり、筆者は僭越ながら辛氏の学風にそうした立場を看取し、予てより共感を覚えていたところである。

又、辛氏前掲著には、「大明宮西夾城南遺址與翰林院和学士院的位置」及び「武則天天堂遺址質疑」なる考察が収録されており、前者は

長安大明宮の翰林院・学士院の所在地について、後者は武則天が建設した明堂の洛陽宮における位置について、文献史学の立場から、考古研究者の発掘調査に基づく考証を批判された点で注目すべき研究である。筆者としては、同書で展開された辛氏の説について、その是非を俄に判じることはできないものの、説得力ある考証であり、考古研究者の物的証拠に即した所論に対して、これを一種の権威として受容してきた筆者自身の在り方に反省を迫るものであった。少なくとも官制や建造物の構造等、当時の人々にとっては公然の知識であった典章制度の分野について、文献の記述は信頼性の高いものであり、必ずしも考古研究者の復原案を前にして、文献史学は沈黙を余儀なくされるものではないであろう。

ところで遺跡だけではなく、近年の中国では出土文書・墓誌・档案等の新出資料の輩出がめざましく、中国史研究者はその対応に追われているのが現状である。ここ数年の『史学雑誌』「回顧と展望」で屢々言及されていることであるが、こうした資料の抱える断片的、局部的情

報といった側面に足をすくわれない為にも、大局的な時代観が研究者に要請されよう。その際の原点は、やはり史書を始めとする伝来の文献史料であろう。陳腐なコメントではあるが、筆者にとって、辛氏の版本を重視しつつ、史書の記載を精細に読み解く姿勢に「基本」の重要さを再認識させられた次第である。

#### 注

1. 同様に『大業雜記』の史料価値に注目された論考として、中村裕一氏「『大業雜記』と『元河南志』」（唐代史研究会『中国の都市と農村』、汲古書院、一九九二年）がある。
2. 拙稿「東都洛陽宮明福門付近について」（『立命館文学』五一九、一九九〇年）、「唐代後半期における延英殿の機能について」（『立命館文学』五一六、一九九〇年）、「唐代常朝制度試論—吉田歆氏『日中宮城の比較研究』によせて」（『立命館東洋史学』二六、二〇〇三年）